

『思い思いの若者たち』



一川崎事件を問うー (1)

事務局長 布袋 太三

テーマとしては少し旬を外しているかもしれませんが、この問題は私たちのような法人にとっては避けては通れない関心事なので、ぜひ、ご一緒に考えてみてください。

5月末でしたか「川崎の無差別殺傷事件」が起こり日本中を震撼させたことを記憶している人は多いと思います。それに「福岡の家族殺傷事件」や「東京の元高級官僚の息子殺し」など何やらつながりがありそうな不条理な事件が相次いで起こりました。

これらの事件報道でメディアは容疑者や被害者がひきこもり状態にあったとして、ひきこもりがあたかも凶悪犯罪と密接につながっているかのような見出しやテロップを連日流したのです。

加えて、「中高年ひきこもり 61 万人」という内閣府発表や「80-50 問題」の喧伝が重なり、ひきこもりは絶望的に困難な問題なんだとする偏見と誤解をまたたく間に多くの人々に拡散させてしまいました。

実際、報道後各地のひきこもり支援組織には家族や当事者の悩みや相談の電話がひっきりなしにかかってきました。

家族は「うちの子も同じような事件を起こすのではないかと心配を募らせ、当事者は「犯人と

自分が同一視される」「ますます外に出られない」とさらに深く沈み込んでいったのです。

実は 20 年程前も、やはり不幸な事件の連続でひきこもりは相当に扇情的バッシングを浴びたことがありました。当時はひきこもりの認知度も低く、メディアは今以上に雑なメッセージを流布し続けてしまいました。

そうした状況に抗し、メディアに精力的に露出しながら事態を沈静化させ、逆にひきこもり理解への道筋を耕していったのは精神科医の斉藤環氏をはじめ著名な心理学者や支援者たちでした。

以来、公的な相談窓口なども少しずつ整備され、良心的な民間の支援組織も次々とつくられていくなど、各方面のひきこもり理解は急速に進んでいったのです。

今回のバッシングはそうした先人の進めた時計の針を戻してしまうほどではありませんが、ひきこもりとその家族の孤立を一層深めてしまったことは否定できません。

私たちはこれらの事件と報道の顛末を冷静に分析し、ひきこもりを巡る世間の眼差しに再び寛容さが戻ってくるよう尽力したいと考えています。このテーマは次号に続きます



あづまプラッツ 活動報告

相談支援員 和田 麻衣

美しい自然と歴史ある熊野の世界遺産群に囲まれた新宮の地で、あづまプラッツは日々活動しています。

現在、当所では、12 名ほどの登録利用者の方々に、居場所の提供、ご本人や親御さんとの生活相談等、各種支援をさせていただいておりますが、その他にも常時 6~7 名ほどの方々とも、なんらかの支援等で関わらせていただいております。

また、居場所・相談業務の他にも、定期的に運動（体育館を借りてのバレーボールやバドミントンなど）や調理実習、不定期にカラオケやボウリング、アクセサリー作り、菜園の手入れや野菜の収穫などを実施し、最近では、全国的にも有名な速玉大社の御船祭を見学したり、地元有志の方のご厚意によるレザークラフト教室（月 1 回）を開くなどして、利用者の皆さんに喜んでいただいております。

今後も、さまざまな支援の形を模索し、ひきこもりの方々と社会を繋ぐお手伝いをさせていただけたらと思っています。

最後に、今年度から、当所の活動は、国の生活困窮者支援事業の一環として市町村からの委託事業に変わりました。これにより諸所変更もあり、運営等未だ手探りの状態ではありますが、より質の高い支援を目指し、スタッフ一同努力していきたいと考えております。

今後とも皆さまのご支援、ご協力をお願いいたします。



レザークラフト教室



バレーボール大会

調理実習

